

日本は東西のかけ橋

「日本は東西のかけ橋」

大分県杵築市出身の重光葵が残した言葉である。

一九五六（昭和三十一年）十二月十八日は、日本にとって記念すべき日となった。日本が国際連合への加盟を果たしたのである。重光葵はその総会に、日本政府の代表として出席し演説を行った。そこで生まれたのがこの言葉である。

一九三一（昭和六年）年、重光は外交官として、上海に住み、日本と中国との関係を保ったり、日本人の安全を確保したりするなどの仕事をしていた。その当時、日本と中国の関係は悪化しており、武力衝突することもあった。重光はそのことに心を痛めていた。

「このままでは、日本と中国は本格的な戦争になってしまう。何とかしなければ。」

重光は、

「国と国との衝突を力によって解決してはならない。戦争は両国の国民を不幸にするだけである。」という信念を貫き、あくまでも話し合いで解決しようと努力した。上海で起こった武力衝突に対して、重光は中国側と何度も交渉を重ね、日本側の司令官に対しても、繰り返し停戦を説いた。

重光の粘り強い外交と欧米諸国の協力により、ようやく停戦協定をまとめることができた。後は、停戦協定の正式書類に、双方で署名するだけとなった。

一九三二（昭和七年）年四月二十九日、ほっとした気持ちで天皇誕生日の式典に出席した重光は、式典の中で、中国との争いの早期終結に対して喜びのあいさつをした。

※国際連合（一九四五年設立）

第二次世界大戦の後、世界の平和を守るため、多くの国が協力して国際的な問題解決をする場として設立された。

※当時の時代背景

昭和の時代になると、世界中が不景気になり、日本でも生活に苦しむ人々が多くなった。

不景気を回復するために、中国に勢力をのばすという考えが広まっていった。

このような中で、一九三二（昭和六年）年、満州（中国東北）にいた日本軍が、中国軍を攻撃し、満州事変になった。その後、中国各地に武力衝突が広がっていく。

式典も終わりに近づき、参加者が声をそろえて国歌を歌い始めた時である。重光の足もとで爆音が鳴り響き、辺り一面に白い煙が広がった。重光は立ち上がろうとしたが足の自由が利かず、今まで経験したことがない激痛を感じた。その時、群集のざわめきの中から、「犯人だ。犯人がいたぞ。」と怒鳴るような声が聞こえた。

重光は、かけつけた警官に声をしぼり出すように訴えた。

「絶対に犯人に乱暴をしてはいけない。警察署長にもそう伝えてくれ。」

重光の真剣な顔つきを見て、警官は直立し、敬礼で了解を伝えた。

重光の右足は、想像以上に重症であり、切断はまぬがれない状態であった。それでも重光は激しい痛みをこらえながら、医師に訴えた。

「お願いがあります。停戦協定の書類に署名するまで、手術を待っていただけませんか。自分で署名して、停戦を確かなものにしたいのです。」

書類の作成にかかる四、五日の間、痛みは続くことになるが、重光の意志は固かった。

事件から六日後、手術の直前に病院のベットの上で、激しい痛みをこらえながら、重光は、停戦協定の署名を自ら行ったのである。



しかし、重光の思いとは反対に、戦争は広がっていった。

一九三三（昭和 八）年	日本が「国際連盟」を脱退する。
一九三七（昭和十二）年	日中戦争が始まる。
一九四一（昭和十六）年	日本がハワイのアメリカ軍の基地やマレー半島のイギリス軍を攻撃し、アメリカ、イギリスと戦争を始める。
一九四五（昭和二十）年	広島、長崎に原子爆弾が投下される。 日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏する。

外務大臣に就任した重光は、一九四五（昭和二十）年九月二日、日本の代表として降伏文書に署名するため、東京湾に浮かぶアメリカの戦艦ミズーリ号へ向かった。

「これでいいのだ。日本は降伏するという現実を受け入れてこそ、再出発できるのだ。」

日本の再出発も、重光の再出発も苦しいものだった。重光は戦争の責任を問われ、四年七か月にわたり刑務所に収監された。

重光は、いつか日本を国際連合に加盟させたいと強く願った。

「戦争の苦しさを知っている日本だからこそ、国際社会の中で武力を用いずに、戦争をとめる役割ができるはずだ。」

国際連合は世界に関する重要な決定を行うところであり、国際連合に加盟することは世界の国々から認められることを意味していたのである。

※国際連盟
第一次世界大戦後の国際平和を維持するためにつくられた。
一九二〇年に四十二カ国で、設立された。
日本は設立の時から加盟していたが、一九三三年に脱退し、世界の中で孤立していく。

※収監
人を監獄に収容すること。

出所後、外務大臣に就任した重光は、日本の復興のためには国際連合への加盟を何としてもやり遂げねばならないと心に決め、世界の国々と良好な関係をつくるため難しい問題にも全力で向き合った。

そして、重光の粘り強い努力もあって、ついに日本の国際連合への加盟が実現した。「国際連盟」を脱退してから二十三年後のことであった。

一九五六（昭和三十一）年十二月十八日、国際連合の総会において、日本の加盟が認められた。重光は、その総会の場に日本の代表として出席し、世界中に日本のメッセージを発信した。



※演説の文章について
実際の演説は、英語による約十五分のスピーチであったと言われています。
次ページにあるのは、その演説の一部をわかりやすい表現にして載せています。
外務省ホームページで、全文を読むことができます。

世界には今なお多くの重大な問題が存在します。

今日、世界が遭遇している不安と緊張がどのようなものであっても、またその原因が異なるものであろうとも、国際連合の力によって、平和的に処理し得ない問題はあり得ないと思います。

平和は、地球規模で考えるべきものであり、日本は国際連合が世界における平和政策の中心的推進力を果たすべきものであると信じています。

今日の日本の政治、経済、文化は、過去一世紀にわたる東洋と西洋の融合の産物です。そういった意味で、日本は東西のかけ橋となり得ると思います。このような立場にある日本は、その大きな責任を十分に自覚しています。

日本が国際連合の崇高な目的に対し、誠実に奉仕する決意を有することを再び表明して私の演説を終わります。

演説が終わると、総会の会場は、割れんばかりの拍手でつつまれました。日本が平和国家として国際社会から認められた瞬間であった。重光の演説は、「日本の未来に対する姿勢がはっきりと示された。」と世界の国々から評価を受けた。

国連総会での大役を果たし、重光は故郷の大分県に帰ってきた。

一九五七（昭和三十二）年一月十五日、重光は母校である杵築高校に招かれ、生徒たちに対して講演を行った。この時、重光は、杵築高校に「志四海」という言葉を残した。現在でも、杵築高校では、この言葉が受け継がれている。

※崇高

・巨大なもの、勇壮なものに
対したとき対象に対して抱く
感情

・何にも比較できない偉大さ
を指し、自然やその広大さ
についていわれることが多い。

※奉仕

報酬を求めず、また他の見
返りを要求するでもなく、労
働を行うことをいう。

「志四海」は、「四海を志す。志が全世界を覆う。志を全世界に及ぼす。」という意味であり、若い人たちが、この言葉を胸に大きな志を抱き、その目標達成のために日々努力を重ねてほしいという重光の願いが込められているのであろう。



国連総会の演説から三十九日後、一月二十六日、重光葵は、自らの使命を果たし、その人生の役割を終えたかのように息を引き取った。六十九年の生涯であった。

※四海

- ・四方（東西南北）の海
- ・世界などの意味